女性学の練習問題——HANAKOさんの自立課題

金井　淑子

①はじめに

本日のテーマは、HANAKOさんの自立課題ということですが、私のような年齢の者が、みなさん方をHANAKOさんという形で枠づけて、女性論、あるいはフェミニズムの立場からお話するとなりますと、何かもう、それだけで警戒をされてしまうのではないかと思います。例えば、女は自立するべきであるとか、社会参加すべきであるとか、もっと言えば、女性は差別されているのだ、抑圧されているのだ、ということで、私の世代が持っている不遇感や抑圧感みたいなものを、みなさんにも共有してもらおうと、声高に主張するというような発言があるのではないか、そういうメッセージが発せられるのではないかということで、反発を持たれるかもしれません。あるいは、もっと言えば、私たち世代が、戦後五〇年間くらい生きてきた者として、今の若い女性はなんだかなっていないとか、どうも女として私たちの世代が持っている実感や女としての課題を共有してくれないというふうな感じで説教じみた話になってしまうのも、私の意図するところではありません。私は今日、そういうスタンスでみなさんに何か声高にものを言う感じで話すつもりはありません。私自身もあなた方と同じ世代の娘がおりまして、その娘との関係でやはり女として少し先を生きてきた者として、日常的にいろいろ先回りして忠告じみたことを言いますと、なかなかそれは受入れられません。反発されることの方が多いのですね。たとえば「『お母さんのフェミニズム』という思想あるいはイデオロギーの押しつけだ」とか、「色めがねで物事を見ているからそんな見方になるんじゃないの」と反発されますから、みなさん方の世代の感じ方、あるいはものの考え方、行動様式などを多少わかろうと努力しているつもり

でいます。そういうわけで、紋切り型でここで女性の自立課題や性別役割分業批判などを発言するのではなくて、今、なぜあなた方とあなた方若い世代が、私たちからHANAKO族というレッテルを貼られているのかを、私の世代、立場から可能な限り理解してみたいと思います。私があなた方のHANAKO論なるものを展開することが、「自分たちのことを言われているにしては非常に心外である」、「いや、なかなか共感できる」など、みなさんがなんらかの形で反発であれ共感であれ、受け止めていただけたらと思いながら、お話していきます。

②トランタンHANAKOのライフデザイン

HANAKOさんというのは、どういう女性をいうのでしょうか。HANAKOさんという言葉が出てきたのは八〇年代です。一九八〇年代というのは、みなさん方がちょうど小・中学生くらいでしょうか、世の中で「女の時代」と言われまして、女性の生き方がその前の女性像から少し変わってきたといいますか、それまであった女性像、つまり女性は若い時に働いて、結婚したら家庭に入って子どもを育ててといった専業主婦的な女性モデルに対して、いや、もうちょっといろんな生き方があってもいいのではないか、と外側からも、女性たち自身の内側からも様々な形でいわれ始めたのですね。女性の生き方が多少多様化した、あるいは自由化が進んだと言っていいのではないかと思います。ですからそういう中で、HANAKOさんという女性像が一つの新しい女性像の記号として登場してきました。その記号の典型例が松田聖子という女性によって体現されたのですね。松田聖子さんというのは超アイドルだったわけですが、結婚しても子どもを産んでもアイドル時代に持っていたものをどれも手放さないで、非常に貪欲にワガママに自由に生きている、そういう女性像がいわゆるHANAKO族、あるいは松田聖子の場合には超HANAKO族、HANAKO族のトップを走るという感じでイメージされたわけです。欲ばりであるとかワガママであるというのが、HANAKOさんを表す内容であったのですね。結婚も仕事も子どもも、さらにプラスαも、というイメージでHANAKOさんは語られました。こんな例によって、「あなた方＝HANAKOさん」と語られていることに、あなた方はもしかしたらすごい違和感を覚えているかもしれません。といいますのは、HANAKOさんというのは今の三〇代半ばからあなた方まですごく幅広く含んでいるのですね。もうすでにHANAKOさんと言われる女性内部も、たいへん多様化し、変化してきています。私がHANAKOという形で今の女性たちをくくる時は、女性の中でも新人類といったイメージなのです。私の世代が原人とすれば、あなた方は新人類で、私の上の六〇代以

上の女性たちは旧人類と言われるほど、現に今の時代、九〇年代の日本の社会を何層ものジェネレーションの女性たちが生きているわけですが、九〇年代の同時代状況を生きながら、女性として持っている女性であることの不遇感や抑圧感か、女性としての生き方の目標や、あるいは女としてのアイデンティティなどが、旧人、原人、新人類の間にはかなり違いがあって、そこではもはや女であることの問題、あるいは抑圧を共通のものとして、一義的には語れない状況にあります。女性はね、と言った時に、女性の内部でも三層ぐらいの断絶がある、その断絶を踏まえて問題を見ていかないといけないと思います。女だったらみんな同じに感じる、女だったらみんな同じように問題を見ている、女という一つの枠からだけ問題をみたのでは、今の時代を生きている女性の様々な問題のリアリティに届かないのではないかという思いがありまして、さしあたって三つの枠を作っているわけです。

HANAKO の中もかなり多様化しているので、もしかしたらあなた方の実感からズレているかもしれません。しかしその中であなた方には HANAKO というレッテルを私はあえて貼って、そういう枠の中で今の女性をどのように見るのかについての話を聞いていただきたいということで、HANAKO という切り口で話を始めているわけです。

HANAKO さんていうのは大変欲ばりである、ワガマである、気儘である、自由であるというイメージで、と申しましたが、資料の『アンケート調査年鑑』の九二年の上期に収録されています「トランタン HANAKO のライフデザイン」をご覧下さい。これによると、HANAKO さんは「納得できる仕事がしたい」と考えています。「仕事に役立つ資格」とか、「男女対等に評価」され、あるいは「一生仕事を続けたい」、これは大勢を占めています。ですから仕事を持って生きるのは、HANAKO さんにとってかなりあたりまえに、自明視されている姿がここから出ています。それから「非常に醒めた仕事意識」があります。トランタンとは三〇代の HANAKO ですが、「上司のマネジメント能力に疑問」がある人が五一・八%、つまり職場の上司に対しても批判眼をきちんと持っているわけです。さらに「アフター5はエニタイムOK」、これは「寄り道頻度」、「ほとんど毎日」と「週に二〜三回」を合わせて五七・八%です。この姿からは、会社は会社、仕事は仕事、あとは自分のプライベート・タイムは自分の思い通りにということで、シングル・アーバン・ライフを楽しんでいる姿が浮かび上がってくるわけです。それから、男性、パートナーに対してどういう像を持っているかといいますと、「生活力があってたくましい人と一緒にいたい」、ということで、ここでは「ルックスよりも実質重視派」が大勢を占めています。いわゆる HANAKO さんが理想の

相手として立てている「三高」とは、背が高くて学歴が高くて給料が高いという、大変身勝手な結婚に対する男性像なのですが、そういった「三高」狙いというのは僅か九・三%、一割足らずであるということで、ここからも、HANAKO さんに対して、一般的に流布している女性イメージとはかなり違ったものが出てきているのではないでしょうか。さらに、次は「好きな人と一緒にいたいけれど、一人の気楽さも捨てられない」、シングルの気楽さが浮かび上がってきます。「結婚するメリット」が、「好きな人と一緒にいられる」というのが七四・六%、「精神的なゆとりができる」というのが六九・六%なのですね。結婚について、女性にとっての位置づけが相対化されてきています。結婚が女性にとって永久就職である、結婚しないと女性は一人前ではないなど、私たちの世代の女性が持っていた、あるいは世間から押しつけられていた結婚観からすると、結婚は女性にとって人生のフルコースの重要な一つではあるけれど、すべてではないという姿が出てきます。それから「絶対に結婚したくないタイプ＝不潔・マザコン・酒癖が悪い」で、ここでも、「スタイルや顔が良くない」のは絶対結婚したくないタイプとしてそれほど上がってはいないんですね。（僅か一・一%）それから、この辺からがこの調査をした第一生命にとっては一番重要な点なのですが、「貯蓄指向は高いが元本保証で安全第一」で、「金融商品保証率」は「定期預貯金」で四九・二%、「生命保険」など、こういう感じです。そして「トランタン HANAKO の五五・三%が貯蓄五〇〇万円以上」という数字が上がってきています。ところが若い二〇～二二歳ぐらいでは、まだ「一〇〇万円未満が七八・二%」で、トランタンとだいぶ違いがあるということで、保険会社にとっては、三〇歳トランタン HANAKO がターゲットとして出てくるわけです。「貯蓄の目的」は「結婚」と「旅行」で、全体の平均では「結婚」が「五〇・三%」、「旅行」が「四三・〇%」ということで、「貯蓄の二大目的」になっています。

こういった調査結果から浮かび上がってくる HANAKO さんというものの読み方は、いろいろあると思います。結婚のために貯蓄している人が五〇%くらいという数字から見ましても、女性たちの中で結婚をする、子どもを産むことなどが女の人生の生き方として相対化されてきている感じがします。

③一・四六少子化にみる女性の意識変化

みなさん一・四六という数字はご存じですよね。どういう数字でしょう。これは特殊合計出生率といって、日本の社会が少子化している、子どもが非常に少なくなっているのを示すものでして、一ケ月前に九三年度の数字が報告されて、それが一・四六なのです。これは単純にいって、一

組のカップルから二人、だいたい二・二人ぐらい子どもが生まれないと人口は単純再生産されていかないのですが、それが一・四六まで落ち込み始めているので、危機感が持たれます。少子化社会の一方で、高齢化社会で大変だということで、いろんな意味で社会問題化しています。それで国の厚生省や様々な関係機関は、なんとかして女性たちに子どもを産んでもらおうといろんな政策をとり始めていますが、私はそういう政策に意味がないとは言いませんが、女性たちの中の底にある意識にどんな変化が起こっているのかをもっと深く読みとる必要があると思います。トランタン HANAKO の白書のような一般的な調査からも、女性たちの中に結婚や子どもを産むことについて、これだけ相対化されてきています。一・四六という数字には、より明瞭に女性たちのある意志表示がなされていることが伺えます。一人でOLをしてお給料を貰い、自由にお金を使っている時のシングル・ライフの自由と引き換えに、結婚したらその自由を失うのではないか、子どもを産んだらもっと自由が狭まるのではないか、という疑問。たまたまそういったものが両立する非常に理解のあるパートナーと結婚することが出来たり、子どもを産むのを両立可能とするような仕事に就けている場合には、結婚もしよう、子どもも産もうと位置づけられますが、そうでない場合は、やはりシングルの気儘な生活を手放すに値するかどうか結婚を先延ばしにしている現状。あるいは三〇代半ばになってなかなかいい相手に巡り会わなかった、ではこのまま結婚しないでいようという判断。といった風に今女性たちの間に少子化問題にまで行き着く前提には、女性たちの非婚、結婚しない傾向、それからシングル化があります。非婚とシングルは同じことですが、ちょっとニュアンスが違います。非婚もシングルも今までの私たちの社会では、女性が結婚しないと未婚という言葉が使われていました。未だ結婚しない、結婚するのは当然の前提にされていて、まだそう状態、一人前ではない状態。シングルという言葉に対しては、独身という言葉がありました。『独身者の憂鬱』なんていう本もあります。独身、あるいは未婚という言葉の持っていたあるイメージを払拭した形で非婚、結婚しない、あるいはシングルで生きるというふうな生き方が、また多数とは言えませんが、女性の中に少なからず芽生え始めています。非婚、シングル、そしてもう一つが晩婚化です。どんどん婚姻年齢が上がってきています。クリスマス・ケーキが売れ残ると、翌日には半値近くになってしまうように、結婚市場における女性の適齢期についても、二四歳が一つの節目だったのが、今は二六か二七くらいに上がってきています。その変化がここ一〇年、二〇年くらいの間に起こっています。婚姻年齢が三歳上昇するのが僅か二〇年足らずの間に起こるのは、人口動態的にいうと大変大きな変

化だそうです。これは今、少子化問題が現実に一・四六と出てきていますが、この晩婚化傾向の進み具合からいうと、少子化の落ち込みは止まらないのではないかと予想する研究者もいます。非婚、シングル化、晩婚の次に出てくるのが晩産です。つまり一・四六という数字の背後には、非婚⇩シングル⇩晩婚⇩晩産⇩少産⇩少子化と、一繋がりの現象がそこにあります。その現象の中には、女性たちもやはり、自分の「女性である」ということのアイデンティティの持ち方、生き方の方向付け、価値観、そういったものに確かな変化が起こりつつある、起こっているのです。

ということでHANAKOさんが、今の私たちの社会に起こっている現実、一・四六の少子化の問題と非常に深い繋がりがあることも、ぜひ頭に置いていただきたいと思います。

④フェミニズム世代のジレンマ

私のような世代は、戦後の平等教育と、フェミニズムという思想に少なからず影響を受けたフェミニズム世代です。そして、今、私の世代の女性たちは、みんな自分の娘世代が大人の女になろうとしている時期に差しかかっています。私自身も含めて、私の周囲では母と娘の間に心理的な葛藤があり、それに深く悩んでいます。子育て最中の保育園の送り迎えやミルクや家事・育児、そういうところで物理的に女として忙しかった時期よりも、今の方が悩みが深いという声が、チラホラ聞こえてきます。私のような生き方をしてきた女の娘は、自立についても、母親をモデルにして後ろ姿を見て育ってくれたかなと思いきや、そうではないのです。むしろ母親である女性に対して、ルサンチマンを引きずっています。恨みの感情を引きずっているのですね。もともとフェミニズムは、女性が男性や男性中心社会に対して「女性である」ことの恨みをぶつけるところをある意味では契機にした思想でありました。女の自立や仕事を持って生きることが、結果として今専業主婦的な生き方をしている女性でも、どこか女としての人生の岐路ごとに悩んでそれなりに選択をした結果、今、あるのが現実です。かつてのように女性であれば、結婚して子どもを産んで家庭の中で家事・育児にいそしむ。そして人生五〇年、子どもを育て終えたなら自分の隠居があって、そのまますぐ、寿命を終えていくというような女性のライフ・サイクルとは、今はぜんぜん違ってきています。どりわけ、戦後の女性たちは男女平等教育、民主主義教育の中で学校教育を経てきており、しかも戦後の女性解放運動、フェミニズムという思想に影響を受けた世代が今度は、自分の娘がフェミニズムに対してアンチの感じを持っている、アンチ・フェミニズムと言えばいいのでしょうか、そういう状況がかなり広く見られるのではないかと感じています。HANAKO

世代にフェミニズムが何を語るのかといった時に、この娘たちの世代が引きずっているルサンチマンを甘ったれているとか、自立できてないとか、いつまでもモラトリアム続けるのよ、という形で切って批判することでは片づけられない問題がそこにはあるのではないか。娘の中に残っているルサンチマン、つまり他ならぬ母である自分に向けられた批判をどうやって理解するのか、ルサンチマンに踏み込んでいくのか、或いはそれを引き受けていくのかということが今、問われているのではないかと感じます。

ごく最近、私が考えているフェミニズム世代の母と娘の確執に触れる問題で、娘の側から自分のルサンチマンや内面を吐露している本を読んだので、ご紹介します。マガジンハウスが出している『透き通ったタマゴ』という本です。篠崎未知佳さんという女性が書いた本です。この女性は今、多分出版社関係にお勤めしていらっしゃると思います。彼女は若い時、十代から二〇代の学生からOLの頃まで、非常に深刻な過食・拒食症に陥いりました。篠崎さんのお母さんは、神奈川県下では老舗の有隣堂という書店の副社長さんです。女性で会社の役員というバリバリでエグゼクティブなお母さまに対して、未知佳さんが抱いている深いルサンチマン、あるいは母と娘の関係で娘が自分で抱えこんだ心の空白、埋めようのない寂しさ、甘えられなかったこと。いつも社会的に頑張って強く、もちろん時々いろんな意味で自分に気を遣ってくれるのだけれど、その気を遣ってくれる母の思いと、自分が母に求めている思いがいつもすれ違い、結果として過食・拒食に陥っていた自分の姿。その自分自身の姿を通して、過食・拒食、或いは大人になりきれない、身体的な癖を残してしまった女性たちのエピソードも盛り込んである本です。登場する女性たちはみんなある意味で、一般的な家庭以上に外側から見た条件がとても満ち足りた、幸せな中流階級のお嬢さんを生きてきています。その女性たちが素敵なカッコイイ母親に対して、娘としては何か大きな空白を抱え込んでしまい、「心の行方不明」になってしまったのですが、自分でもどうして行方不明になってしまったのかわからないから苦しんでいる。誰か好きな人ができても、その人にほんとに心身共に女性として向き合えない、今でもぬいぐるみがないと寝られないなど、いろいろなおもしろい、人に言えない身体の癖を引きずっています。それが何か自分が社会的な場面に出なくてはいけない、あるいは大人の女としてほんとの恋愛関係の中に立たなくてはいけない場面で、何か自分の身体の癖みたいなものが足を引っ張ってしまってモラトリアム状態を続けている、そんな姿が浮かび上がってきます。私は少し、娘の世代の自立拒否症といいますか、モラトリアム症状の内面に触れたかなという思いで、この本を読みました。

そういうこともございまして、私の中ではHANAKO、いわゆるHANAKO問題というのは、私自身の母娘問題、そしてフェミニズム世代とその娘の世代が持っているアンチ・フェミニズム感情をどうやってフェミニズムが解くのかという課題として大変興味深いです。興味深いと申しますと、軽いいい方になりますが、非常に切実な問題として抱え込んでいるということです。

針金ザルと毛布ザルのパーソナリティー実験というのがあります。どういうことかと申しますと、パーソナリティー実験で、サルにミルクを与えるのですが、毛布でできた造りものの母ザルの方はミルクが出ないで、出る方の母ザルは針金でできていますが、サルはほんとに空腹以外の時以外は、ミルクの出る針金ザルの方には行かなくて、いつも毛布ザルの方に行きます。私たちフェミニズム世代は、なんだか一生懸命生きてきて子どもとの関係も一生懸命やってきたつもりです。食べさせることや飲ませること、そういったことで自分は手を抜かなかったつもりで、専業主婦で家にいる人と変わらないようにやってきてあげたつもりだという思いがあります。でも、私がもしかしたらと今不安に感じるのは、娘の世代が持っているルサンチマンには、毛布のやわらかさを与えてこなかったことが関係しているのではないかということです。昔に戻ることはできませんが、それが今、娘たちの中の大きな躓きや空白になっているとしたら、それをどうしたら癒すことができるのか、どうやってフェミニズムがそれを考えていくのかを見ていく必要があると、この針金ザルと毛布ザルのパーソナリティー実験をテレビで見ながら、考えたりも致しました。

⑤日本女性史におけるHANAKOさん

それでは、HANAKOさんという女性を、日本女性史の中でどういう存在なのか整理してみたいと思います。広告批評誌『アクロス』の中での言葉遣いに、「近代女性史におけるHANAKOさん～『婦人・おんな・女の子』」という切り方をしているものがあります。平仮名の「おんな」を、私はあえて女性・おんなと表します。戦後の私たち世代、あるいは私よりちょっと下の団塊世代の女性たちは、女性運動の中でウーマン・リブ運動という新しい波の影響を受けている世代です。その先行の世代、婦人会活動、地域活動、主婦連活動など、女性として社会運動を行っていた私たちの上の世代の女性たちとは、運動感覚や何を運動課題、女の問題とするのか、かなり違いがあります。婦人とおんなと女の子。（私は女の子のところに少女という言葉も加えます。）戦後のウーマン・リブ運動は、アメリカでは六〇年代後半、日本でも七〇年代の初頭に起こりました。ウーマン・リブ運動の前、戦前にももちろん女性解

放運動はあったのですが、女性解放運動の始めは、参政権運動でした。女性に政治的な参加権がないのは、大変見えやすい差別ですから、女性解放運動は運動として参政権運動から始まりました。その参政権運動で始まる戦前の女性運動を第一次女性解放運動といいます。戦後女性が選挙権を手にし、法律や制度上の男女平等を手にした段階で、次の段階で女性たちは自分たちを生き難くさせているのもの、女性の自立や解放や自己表現を阻む大きな壁になっている問題に気付きました。それは女性の身体や生活に関わるところでの自立課題としての妊娠の問題です。妊娠人工中絶の自由化を要求することが、戦後の女性解放運動の新しい波を作りました。日本の事情は少し違っていて、戦前からあった優性保護法の中で、経済的理由による人工中絶を自由化しました。それは一九五〇年前後です。ですから、日本社会においては、一応経済的条項を満たすと女性は中絶できたのですが、欧米諸国では、戦後になっても中絶は自由化されていませんでした。カソリックという宗教の中でも原理派は中絶禁止の路線を強固にとっていまして、女性の避妊についても、日本でいうオギノ式以外は認めません。オギノ式というのは、排卵日を避けて性交渉を行うことです。こういう非常に古典的な体のバイオリズムに合わせた避妊性交以外、今もって認めようとしません。欧米社会のキリスト教は、文化の上では非常に根深い影響力を持っています。ですから第一波の選挙権獲得、参政権運動に対して、第二波の妊娠人工中絶の自由化運動、これは欧米で大変大きな運動として、女性はその一点で超党派でまとまる大きな波を作りました。日本の社会は今申しあげましたような少し違った事情でしたから、運動としてそれほど大きな盛り上がりはないのですね。むしろ中絶を制限、禁止するという政治的動きがあると、それへの反対運動という形で動き出し、少し運動の盛り上がりはありました。

ということで戦後の女性運動の新しい波は、女性の中絶権を要求する、中絶の自由化に端を発しています。ですから要求内容がぜんぜん違うわけですね。中絶権を要求することは、社会や国家に対して中絶権を要求することです。同時に、男性と女性という自分のパートナーや恋人との関係でも、女性の性的自己確立が問われることになります。自分は産みたくないとか、今は妊娠したくないとか、たとえ妊娠していろいろ悩んだけれど、今は自分にとって産みたくないのだ、もし今子どもを自分の人生の中で引き受けてしまったら、やはり自分の人生の軌道修正を余儀なくされるのだ、だから不本意だけれど今は緊急非難権として中絶権を行使したい、というようなことをパートナーとの間できちっと言いあえるような関係性ですね。対等なパートナーとして向き合う上で性の問題が重要なテーマになっているということです。ですからここからは女性にとっての

自立課題も、性的な自立、性的な自己確立、性と生殖というものを自分の女としての性、また、そこから起こってくる生殖という問題に対して、それを自分の人生の中の自分自身で決定していくべき一つのものとして位置づけるような、そういう自立観、あるいは自立権が問われるようになってくるのですね。第一波の女性運動の中で、女性に参政権がないのはおかしい、教育が別学であるのはおかしい、女性は労働の世界でかくも差別されているのはおかしいという形で参政権や教育権や労働権を社会に向かって、男性社会に向かって要求するという、そういう形の政治的権利や経済的な活動においても、女性を公的な世界に入れて、というふうな形で出てきた解放要求や自立要求とは内容が違ってくるのですね。そういう意味で、第二波女性解放運動はウーマン・リブ、WOMEN'S LIBERATION と言うのですね。私はまさに、学部・大学院の段階でウーマン・リブ運動の洗礼を受けています。その前の世代、それがプレ・リブ世代。それから、ウーマン・リブなんてあったの？ というのがみなさんです。私から伝聞形でこういうことがあったのよ、という話を聞いているみなさんがポスト・リブ世代です。ウーマン・リブという運動を挟んでプレ・リブ、リブ、ポスト・リブに分けられると思います。これはどういう時代の風を受けたかという目安からの女性像の問題ですが、こう分けることによって「日本女性史における HANAKO さん～『婦人、おんな、女の子』」と『アクロス』が分類してくれている女性が、何を女の問題として感じるか、何を女の抑圧、不遇感としているのかといった中身の違いがわかってくださると思います。

⑥婦人／女性・おんな／女の子

婦人世代にとって大きな影響を与えた女性誌、婦人誌は何だろうといった時、ここでは『婦人公論』という雑誌があげられます。今でもこの雑誌はありますね。最近は告白記事やスキャンダラスな女性週刊誌の影響を受けた感じの作りになってきています。『婦人公論』が戦後登場した頃、これは『中央公論』と並んで大変硬派な女性のオピニオン誌の性格を持っていました。ですから『婦人公論』を読んでいる女性は、かなり問題意識の高い女性、専業主婦的、良妻賢母的な生き方をモットーとしているけれど、同時に社会的な自己実現、社会的な参加を考えている世代でした。婦人世代に影響を与えた雑誌は『婦人公論』と、もう一つ羽仁説子さんが作られた自由学園の流れを汲む『婦人之友』があります。この女性たちの意識も、一昔前の自由主義・生活合理主義の立場から、いわゆる婦人という言葉でくくられるような女として非常に堅実な生き方をしながら、しかし社会や生活のことにも目をいき届かせ、子どものことをやはり女たちと一緒になって社会に運動として出して

いく、そういう世代なんですね。この人たちの運動感覚、運動のやり方は、地婦連や主婦連などの婦人団体を作って、おしゃもじを掲げて国会に請願に行くイメージがします。この婦人世代は戦後とてもいろんなことをやってきましたし、日本の女性運動の中では主婦、あるいは母親運動としてとても大きな足跡を残し、大きな成果も作ってきました。けれども、どうも私たちの世代の運動感覚からいいますと、この世代の運動スタイルにはついて行けません。そもそも運動スタイルがピラミッド型なんです。男性の労働組合や政党の作り方と同じピラミッドで、会長さんや顧問がいてその下に事務局、一番下に一般会員がいて、上の役員会で方針が決定されると下に指令というか運動方針が下りてきて、さあ、では何月何日国会に請願デモに行きましょうという動員スタイルの運動なんですね。どうもそれに対してはついていけないものを感じるのが、「おんな」の世代なのです。このおんなの世代は高度成長期を背景に登場しました。我々世代と我々の下の世代の女性の生き方に影響を与えている代表的、象徴的な雑誌は『クロワッサン』ではないかと思います。『クロワッサン』という雑誌は今でも、「四〇代の男と女の暮らしを考える雑誌」というようなサブ・タイトルになっていますね。九〇年代に入る頃、対象層を絞り、少しイメージ・チェンジをしました。もともと『クロワッサン』を読んできた世代が四〇代に入っていますから、その四〇代世代をターゲットにした雑誌に変わってきています。この前の世代が専業主婦や良妻賢母的な生き方をしながらも社会参加もする生き方であるとすれば、『クロワッサン』に影響を受けているおんな世代の課題は、〝自立〟が大きなテーマなのです。婦人世代にとって、婦人参政権を手にしたのは彼女たちにとってすごい解放だったわけですが、おんなの世代は雇用均等法を女たちが獲得しました。実際に施行された雇均法はいろいろ問題があるのですが、ともあれ女性が働くのを前提にして、雇用の場の機会の均等が法律として作られました。これを手にした世代なんですね。生き方の中では仕事と子どもや家庭、結婚が対立し、選択の悩みの種でした。そういう意味で自立がテーマになっていたのです。その世代は結婚して家庭に入ってもそれぞれのこだわりの中でグループを作り、そのこだわりを運動化して繋がりも作っていくし、さまざまな運動もしかけていきました。生協活動や住民運動、環境保護運動、子どもたちの給食問題や地域の遊び場問題など、それぞれの課題がありました。前の世代のように上からの命令で、米の消費者価格がこんなに上がるのはけしからん、だからみんなで議会にしゃもじを持ち、たすきがけで抗議に行く運動スタイルではなく、自分たちがそれぞれ問題だと感じるものを、問題を感じる者同士がシングル・イッシュー（個別課題）ごとにグループを作ってそれを運動化

していくスタイルに、おんなの世代の運動感覚は変わっていきました。このへんでも、婦人とおんなの間には落差があるのですね。落差じゃなくて、断絶ですね。旧人と原人の差があるのです。ところでさらに、女の子世代はどうなのかと言いますと、これがいわゆる『HANAKO』という女性誌に自分の生き方を見出している、方向づけているような女性たちです。彼女たちにとっては、自立ってなあに？特に自立なんて考えないわ、気儘にワガママに生きれたらいいわ、とワガママがキーワードではないかと思います。『アクロス』がやっている分類は多分に恣意的、読み込み過ぎのところもありますが、特徴を洗い出している意味で、ご覧いただきたいと思います。女の子世代がどういう社会制度や自己実現を望んでいるのは、クウェスチョン・マークになっていますね。これが『アクロス』が分類している婦人とおんなと女の子という指標なのですね。したがって「女であること」と言った時に、三つの言葉でカテゴライズされた女性の間には、同じ「女である」イメージや自立観や解放感や抑圧感はかなり違っているのではないでしょうか。社会参加や自立のイメージも落差、断絶があるのではないかと思います。さらにポスト・リブの女の子世代も、均等法を挟んで区切りがあると思います。自分の学生時代に均等法がスタートした世代を挟んで、均等法がなかった上の世代と、もう均等法があってあたりまえのあなた方の世代との間にも、働くことや結婚や子どもについての考え方にかなり違いがあるのを指摘する人がいます。私もその指摘に随分示唆は受けています。

⑦プレ均／モロ均／ポスト均

プレ均／モロ均／ポスト均、プレは均等法以前の世代、モロはモロ均等法世代、ポストはポスト均等法世代です。モロ均世代は、自分の学生時代のちょうど三年か四年の就職活動の時、均等法が出来てこれからは女性も頑張ろうと思えば道は開けたんだ、という感じでその前の世代の女性たちがどんなに苦労しているか知っているから、均等法の有難味がひとしおでした。厳しさはまだ当時見えなかったかもしれませんが、その後厳しさがいろいろわかってきました。そういうわけで、均等法を挟んでやはりHANAKOさんたちの間にも、意識の落差がありそうです。プレ均世代は、もし仕事を続けるのだったらバリバリ自己実現していこうとします。そういう形で生きることと、女として結婚したり子どもを産んで育てることとが相容れない時は、やはりそこで非常に悩んでいわば雅子さん現象的なことが起こってきます。雅子さんは国際的に活躍できる超・キャリア・ウーマンでしたが、その超・キャリア・ウーマンにとっても日本的社会においては女への結婚のプレッシャーはとても強く、しかも三〇代という年齢壁もプ

レッシャーとしてあって、結局雅子さんはもう一つのまたすごいキャリアを選びました。いわゆる結婚・リタイア現象が起こりました。ですから、キャリア・女性の挫折はプレ均世代で起こっています。

ところがモロ均世代は均等法が出来て仕事も家庭も子育ても両立可能かな、ということになりました。私はこの世代はちょっとおもしろいと思います。モロ均世代にとって女は結婚したらもう仕事と家庭の両立はすごく難しい、子どもを産んだらさらに難しい、だから自分の人生にはもしかしたら結婚も子どももないかもしれないな、と女である部分を見ないようにして仕事やあるいはもっと別な社会活動の上で自己実現をしていくしかないかなと思っていた時に、育児休業法が制度化されました。そしてたまたま付き合っていた男性がいて子どもも出来ちゃったので、では結婚して子どもも産むかということになって、それで制度を利用して子どもを産んでみるのですね。そうしたらそういう女性が私の周りに少なからずいるのですが、その女性がこういう感想を洩らしました。「金井さん、私は育休取って子育てするまでまさか自分が結婚して子ども産むなんて考えてなかった。自分の人生に子どもなんか似つかわしくないと思っていた。だけど子どもを産んでみて私はこの制度がなかったら、絶対に感じることのできない手応えを感じている。それは何だったかと言うと、生きものとしての充足感なんですね。」と。私がやっているフェミニズム研究会で月に一度くらい会う若い女性なのですが、さらにその方は「私はもちろんこのフェミニズム研究会でいろんな研究をしたり議論し合うのは、ものすごく頭が熱くなる充足感でこういう充足感を手放したくないから、子どもなんて産むことはないだろうと思っていたけれど、でも子どもを産んで子どもと関わってみて、これは何とも言えない生きものとしての手応えだ」と言うのですね。私はこれはすごく嬉しかった。そういう感じ方と言いますか、感情がモロ均世代に出てきていることにですね。ですから頭が熱くなるのと、生きものとしての熱さ、両方女として自己実現できたらそれはいいですね。今までは頭が熱くなる自己充足を求めればやはり自分の女として身体を切り捨てて、私は子どもなんか産まないだろう、産まない方がいいだろうと、そういう生き方を余儀なくされてきた世代からすると、モロ均世代の中に育っている感情はおもしろいと思います。でもその時この話を聞いていた同じ世代の女性で、「それはあなたが育休を終わって帰る所があるからよ。育休終わったら仕事の世界に戻れるから、育休中の自分の子どもとの関わりに生きものとしてのすごく手応えのある実感を感じたなんて言えるのよね、専業主婦になってしまった女性は、もう退路を絶たれて子育てだけの日常に向き合い、結婚前には予想もしなかった現実の中で育児不能症候群に

陥っているのよ。」という感想を洩らした人もいて、すごくおもしろかったです。私はこれ以上注釈はしませんので、みなさんがどういうことを考えるのかは宿題にしておきましょう。

それでポスト均世代は、もう均等法が施行されてかれこれ八年くらいになります。その世代にとっては仕事か子どもか、仕事か結婚か、仕事か家庭かという二者択一というよりも、専業主婦的な生き方もラクで自由がきくのだったらいいじゃないか、という選択の仕方が出てきてきます。それからこの辺ももしかしたらみなさんがそんなはずない、随分ひどい侮辱した言い方だわ、と思って下さったら私としてはとっても嬉しいのですが、女性の生き方を狭く考えるのではなくて、逆に専業主婦の方がラクで自由な生き方ができる、仕事を抱えてしまった男の人生よりも、女として、専業主婦としてその中で自由に自己実現していってもいいのじゃないか、という生き方の選択肢も芽生えてきているような気がします。それから今、みなさんも大変な思いをしてらっしゃると思いますが、女子学生の就職戦線が氷河期ということで、そういう中での結婚、専業主婦への指向といいますか、そこへ逃げ道を求めていることはないだろうか、と思います。これもクウェスチョン・マークで、敢えて私が論評や結論めいたことは申さずにおきます。

ということで、いわゆるHANAKO族の中にもこのような形で多様化しています。さらに、三〇代からみなさん世代くらいまでのHANAKOさんの中の働くOL女性たちも、かなり変わってきています。その内部もOLというふうに一括りに出来ないほど多様化しているのですよ、と広告批評誌『アクロス』が作った図表があります。いわゆるマスOL、塊としてのOLから新中間OL、新中間はなんとファジーです。ファジーOLの誕生です。いわゆる「HANAKOさん。適当に遊び、適当に働く。いずれは結婚もしたい、二〇代後半でお金もあるフツーのOL」というふうにこのファジーOLは規定されています。その前のマスOLは、「二〜三年したら結婚するつもりのフツーのOL」です。この女性たちの情報誌は『オレンジページ』や『ヴァンサンカン』だそうです。『ヴァンサンカン』は二五歳という意味で、いわゆる結婚適齢期を表わしている雑誌ですね。それから『MORE』。こういった女性たちにとっては、家庭や結婚は自分の人生にとってやはり一つの大きなテーマです。ですから二、三年したら結婚するつもりです。でもこの女性たちも、結婚したらもしかしたら今の気儘さを失ってしまうかもしれない、子どもを産んだらさらにもっと制約されるだろうということで、結婚する気でいるのですが、出来るだけ結婚を先延ばしする晩婚化があります。それで晩婚⇩晩産⇩少産⇩少子化に繋がっていくわけですね。OLと言われる女性たちも、もうちょっと

内部を見てみるとファジーOL、HANAKO さんという形で登場している女性たちの姿が浮かび上がってきます。

⑧マタニティ HANAKO 登場

次にお話したいのは「マタニティ HANAKO の行動様式」です。マタニティと言うのは、結婚して子産み、子育て中の HANAKO さんのことです。この女性たちの行動も大分変わってきています。私の『女性学の練習問題』という本のサブ・タイトルは、『HANAKO と婦人のはざまで』です。婦人は私の上の世代で、HANAKO は私の娘、そのはざまで女としていろいろ考えていることをエッセイ風にまとめた本です。そういった本を書いていたからなのでしょうか、富澤まゆみさんという方は、何か読まれたのでしょうね。私たちはこういうことをやっている、つまりマタニティ HANAKO がママとして活動していると、分厚いいろんな資料を送って下さって、金井さんは私たちについてどう見ますかとボールを投げて寄こしたので、私は少しコメントしてエールを送り返しました。その女性たちの行動様式は、非常におもしろいのです。彼女たちは、子どもも可愛い、子どもも大切だ、けれども私も大切なんだ、自分も可愛いんだ。子育ての中の時間は子育ての手が抜けるまで、と待ってはいられない、子どもを連れて、子どもと一緒になっていろいろ行動してしまおう、ということです。この人たちの繋がり方がまたおもしろいのですね。マタニティ雑誌、育児雑誌などの読者の投稿欄で、シンパシーを感じた人や同じような悩みを抱えている境遇が同じような女性と連絡を取り合って、そこからネットワークが作られていくのですね。ですから彼女たちの繋がり方も、もう私たちの世代とは違ってきています。今マタニティ雑誌はすごく多様化して、いわゆる出産、育児も商業化されています。産業化もされているし、商業化もされているのです。私がみなさんに老婆心ながらのメッセージを送るとすれば、そういう商業化されたいろんな女性誌や情報誌に動かされて、そういうもので自分の人生を考えないでほしい。外からのマニュアル化された情報に自分を預けるような生き方をしないで、もっと、自分自身は本当に何がしたいのか、ということを考えてほしいのです。ところが、子産み・子育てが商品化、商業化、ファッション化されてしまっている状況の中で、そういう情報誌を逆手にとって、逆に女性たちはそこから繋がりを持って、「この指止まれ、HANAKO 族主婦」、ということで、主婦のネットワークの富澤まゆみさんのような行動様式が出てくるわけですね。「柔らかな変革者」という文章の中でこう言っています。「『子供はもちろん大切です。でも自分の能力を子供のためだけに犠牲にしたくない。子供の手が離れるのはいつだろう。それまで待っていたら、年をとってしまう。せっかく

の三十代の感性を、子育てだけにとられるのはいや』…四年前、精神科医の夫の間に長女が生まれた。…日中は子供と二人だけ。『密室育児という言葉どおりの日々でした』」密室育児が幼児虐待を生むのですね。こういう意味でも、密室育児から自分たちがどんどん飛び出て行く彼女たちの行動様式は、私はとても意味があると思います。「『ハナコ族』だった独身時代との落差。孤独な育児。そんなとき、夫の仕事の関係で静岡県に転居した。『よし、ここで自分流の母親サークルを作ろう、と思ったんです。私の腕の見せ所だなって』保健所の予防接種の日に手作りのビラを作ったり、地元の沿線新聞にメンバー募集の案内を出したり、公園で話かけたり。静岡で一年半の間に七十人以上のネットワークを作り上げた。東京に戻ってからも、ネットワーク作りを続けた。入会の際にキャリアや何ができるのかを書いてもらう。いわゆる育児サークルだと思って来たお母さんには遠慮してもらっている。遊びだってしたい。忘年会は六本木のディスコで踊った。母親は『人材』だ。仲間と横浜市内にアパートを借りて会社づくりを進めている。そんな母親たちに、企業が目をつけだした。」ということです。企業はまたこういう女性たちのネットワークを利用するのですが、ともあれ、すごいパワーですよね。こういうHANAKO族、マタニティHANAKO族の行動様式は、非常に違ってきていることを、私はお話したかったのです。

⑨「少女化」現象

さて、今まではややポジティブな面の話をしてきたのですが、今のHANKOさんたちの全体として浮かび上がっている行動様式、意識を通して見えてくるのは、それをネガティブな面を見ていくと、私はそこに「女の子」に対して「少女化」現象と言うべきものがあるのではないかと考えています。

今、私たちの社会にいわゆる母のイメージで自分の女性としての生き方を考える世代があります。母というのはやはり家庭の中での役割ですね。妻役割、母役割の中で自分を生きること、もっとそれをイデオロギー的に支えているのが良妻賢母的な女性観です。子のため、夫のために生きる、自分の身体を一〇〇%家族のために開けている、夫や子どもがいろんな家事や育児の上で要求を出してくる時に、いつでもスタンバイ出来るように自分の体をいつも家族の中に置いておく。そういう生き方をよしとしている女性像に対して、私の下の世代の女性たちは、妻や母であるだけではなく、もっと言えば、妻や母である前に、女としての自分を生きたいという要求をもっています。

戦後の新しい女性解放運動の波を象徴するスローガンは、「母や妻である前に、女として自分でありたい」という言

葉でした。女性は結婚すると○○さんの奥さんになってしまい、子どもが生まれると○○さんのお母さんになってしまいます。結婚前に自分が固有名詞で○○☆子、◇◇☆美と呼ばれていたのとは違い、名前がなくなってしまうのですね。そういうことにとても疑問を持ったのです。専業主婦として食べることにも不自由のない生活をしていても、どこかで自分がスポイルされている、置き去りにされていってしまう、そういう主婦的な生活の中とても満たされない想いを感じて、その主婦としての生き方に心の空白を抱え込んでしまった女性たちが、私は誰なのだろう、と自分探しの運動として始まったのがウーマン・リブ運動なのです。運動の具体的な要求課題は、政治的な中絶自由化になっていきました。その底流にあるのはもっと幅広く、高度成長期の先進諸国に登場する核家族モデル・ファミリーの専業主婦的女性の生き方、その女性の生き方に何か深い穴を見付けてしまった女性たちが私は誰？と問う運動だったのです。家庭の中の妻や母という主婦役割を生きるのではなく、それとは別に自分の世界、自分の自己実現の場を持とうとする女としての自己主張が出てくるのですね。

ところが、日本の社会において、母の世代の女の生き方は、子どもが出来たら五人も一〇人も産み育て、産み終えて下の子が小学校くらいには自分の人間としての人生も終わっている生き方をしていました。戦後の特に高度成長期以降の女性たちの中には、バース・コントロールで子どもを産み続けて終わる女の人生ではなく、生殖のために生きる女の人生が非常に限られてきます。そこで生殖に起因する子作り、子育ての母役割も非常に短くなってきます。物理的に家事も合理化・省力化されていますから、違ってきています。日本の社会の状況を見ると、私はどうも女性たちは母から自立した自分の女としての生き方をきちんと摑まないままきているのではないかと思います。私たち世代の母と娘の世代は、「親子合作のお嬢様ゲーム」に耽っているではないでしょうか。消費社会が八〇年代の半ばくらいから、高度消費社会という言われ、高度という冠がつけられるようになり、質的にも変わってきました。そういう経済の豊かさや高度消費社会を背景にして、母と娘がグルメやエステやファッションに親子で入れ込んでいる姿が浮かび上がります。この限りにおいては、糠味噌くさい母イメージや妻役割からは自由に開放された女たちの姿があります。一方で夫たちの労働の場が厳しいリストラの嵐が起こっていますし、技術革新がどんどん進んでいって、もう自分がかつて身に付けた知識なんて使いものにならなくなって、新しい波が入ってきています。そういう中で、男性たちも労働の場で非常に追い詰められた状況にあるのです。その男たちの中に、帰宅拒否症のような心理的傾向が深まっていて、男性たちが女性美人カウンセラーの所に、

家庭や職場における精神の緊迫感を解きに通うのです。そういう夫である、父である男たちの姿を尻目に、母と娘が消費社会を満喫する、そんな形で私たちの社会では、女として母である我々世代も娘の世代も自立しようとしないで、少女化現象の中に陥っているのではないかと思います。

⑩おわりに――自立・自律再考のとき

フェミニズムへのバックラッシュ（逆襲）が言われ、現実に女性の就職戦線からの締め出しが起っている現在、いまこそ女性としての生き方の「自立・自律」を再考するチャンスの状況にあるのではないかと感じています。制度の上でも雇用均等法と育児休業法がスタートして、働く女性の労働環境が整備されました。そうしますと、今までのように女性たちも制度の不備を口実に、やはり仕事なんか出来ないわ、仕事の上で社会参加や自己実現したくても差別があるのじゃないの、と言えなくなりつつあります。さらに状況的に、少子化、高齢化、環境の危機やリプロダクティブ・ヘルス――これは最近出てきている性と生殖に関する健康という考え方ですね。健康という概念を、今まで使っていた健康概念よりもっと深刻な問題として、世代間の再生産の危機として捉えていこうとする考え方です――こういう問題も出ている中で、私たちはやはり女としての「自立・自律」のテーマについて再考するチャンスだと思います。

その次に「HANAKO さんの自立課題」として、先ほどの『透き通ったタマゴ』に登場する女性たちが、タマゴの薄い皮膜の内側から破ってでてくる力、勇気を持ってほしいと思います。或いは、いつか王子様が自分の幸せを運んで来てくれるのを待つシンデレラ・コンプレックスを越えてほしいと思います。自分の自己実現や自己表現や性的な自己確立、性的自立もきちんと考えてほしいです。そのためには、経済問題も不問に出来ません。いわゆる経済的自立の問題ですね。これも言っておきたいのです。ここで私は、エリカ・ジョングというアメリカの女性の言葉をみなさんに、敢えて毒を含んだ言葉としてご紹介しておきたいと思います。彼女はこう言っているのです。「忘れてはいけないことは、食べるために、また子供を学校にやるために、もし誰か特定の人を喜ばせなければならないとしたら、あなたは絶対に自由な女になれないことよ。それは不可能よ。だからまず、経済的自由をもたなければ。それから他の問題、心理上の問題が起こってくる」。これは結婚という妻と夫の関係性の中で、妻である自分がもし夫の機嫌を損ねたら明日から食べることに事欠いてしまう、離婚したら子どもを学校にやることは出来ない、だから夫を喜ばせていこうという受け身な妻と夫のパートナー関係を生きているとしたら解放はありえない、ということです。こ

の言葉も、みなさんにぜひ後で反芻していただきたいです。

最後に、主婦という女性の生き方がいま日本社会において大きくゆらぎを見せつつある現実からも、女性としての生き方は問い返しを迫られています。

従来の日本の社会にあった税や年金などは世帯単位で、妻や専業主婦的な生き方をしていた人たちは、いろんな意味で税制的に優遇する措置があり、専業主婦的な生き方を奨励するような制度がありました。今それを国が税制審議会で取り払う方向で審議しています。政策上の財源問題から税や年金など個人化する方向が出てきてしますが、それが本当に女性の個の確立に繋がるのかは十分にチェックしていかなくてはいけません。国も専業主婦という女性の生き方ではなく、女性も働きながら、かつ年金の拠出主体、福祉の拠出主体になるべきだという女性像を出してきているのです。ですから、働くことを自分の人生の中に大きなウエイトに置いてほしいということですね。したがって私は「自立・自律」の問題は一律に解けるものではなく、それぞれの関係性の中の、それぞれの条件のもとでの「自立・自律」のシナリオは、各人各様ではないかと思います。非常に多様化している女性像の中で、みなさんにお話したい自立の中身としてかくあるべきだという紋切り型の自立論を呈するつもりではなく、今お話したようなことをぜひ考えていただきたいと思っています。

ありがとうございました。

（かない　よしこ・長岡短期大学・女性学／倫理学）

＊一九九四年一〇月四日「総合科目・女性論」での講演テープを編集部でおこした文章に加筆いただきました。